

※ここには不登校状態等の困難さを抱えているお子さんのご家族がSNSに書き込んだ切なる想いに私が反応したものです。私が実際にコメント欄に書き込んだり、あるいは書き込まずに自分の覚え書きとして作成した文章も含まれています。書き込まれる人たちの多くは長文での書き込みが大半ですが、ここでは書き込まれた困難さのポイントのみを茶色で簡潔に記しています。もちろん書き込まれた人が生活しておられる地域や、個人情報等には細心の注意を払って綴っています。なお順次、記載内容が増えていきます。

※これまで、切なる想いで綴られた文章へのコメントは何度か書かせていただきましたが、今回、はじめて自立して(笑)、書かせていただくことにしました。ただ、どうしてもソーシャルワーカーといった役割機能からの視点となってしまうことを申し訳なく思っています。それでも私の場合は自分自身の不登校経験を踏まえて(そうした経験があったからこそ)ソーシャルワーカーといった働きに導かれた、といった個人的背景を有するため、少しは当事者目線で考えをまとめることができているかもしれません。以下、少し長いですが、よろしければお読みいただくと感謝です。

◇さて、学校ソーシャルワークの領域では「困り感」という表現をよく使います。特徴のあるお子さんを持つ保護者さんが、わが子の様子を見ていて「困ったなあ・・・」「ほんとうに困ったなあ・・・」「どうしたものかなあ・・・」等々と思ってしまう感覚です。そして、そうした「困り感」を、表現はさまざまですが、吐露してしまいたくなる気持ちはよく理解できます。ただ、私個人としては「吐き出す」といった、やや感情的な表現には違和感をおぼえますが・・・私の場合は吐露という言葉が好きです。

◇「困り感」と言っても、それは保護者さん側からとらえる「困り感」であって、お子さん自身が「困っている」かどうかについては必ずしも連動しません。ですから「困り感」を持たない子どもにとっては、周囲の大人たちが、自分のことで気をもんでいる様子が不思議そうに見えるのかもしれませんが。ただ、お子さんも、保護者さんも、共に「生きづらさ」を抱え込んでおられる場合は、ほんとうに気の毒です。

◇ともあれ、お互いの「困り感」を同じ地平で素直に吐露し合いながら、そこから「何か良きもの」を得ようとする行為は否定されるべきことではないと私は考えます。ただ、ゆとりのなさや、表現の足りなさゆえに、「まったく、ウチの子どもには困ったものだ！」等々と書き綴ってしまうと、単なる「愚痴の言い合い」や「言いつ放し」の状態となり、前向きな発展性に乏しいように感じます。そしてわが子の存在を肯定的にとらえることができにくくなり、そこからネグレクトや虐待行為が発生したりもします。

◇「節度ある愚痴」というのがあるのかどうか定かではありませんが、そうした規範に則(のっと)った書き込みを、との主張を強調し出すと、「ああ、ここでは愚痴は言えないのだなあ・・・」と感じてしまい、口を閉ざしてしまい、去ってしまうか、匿名掲示板のようなサイトで、さらにドロドロした感情を吐露するしかなくなります。

◇おそらく私を含めて多くの人たちは、ときとして「どこかで愚痴や泣き言を言わなくては、人生、やってられないよお！」といった状態に陥ることもあるのだと思うのです。さらには「できの悪い子ほどカワイイ」的に、「お互い様だから分かると思いますが、ウチの子どもったらねえ・・・」などと「身内意識」で、つい愚痴ってしまう気持ちも分かります。ただ、それにしても、ある程度の配慮と節度とが必要であるとは思いますが・・・

◇私は3.11の被災地域で生活してきた者です。そのため、ひとりのボランティア・ソーシャルワーカーとして、仮設住宅で、それはもう激しいまでの困難さや理不尽さ等を体験した被災者さんたちと歩んできました。現在、放映中の朝ドラに出てくる、大津波で持ち船と、愛する家族を失った、ある漁師さんの苦しみは、私なりによく理解できます。否、私自身もそうでした。なぜなら私の場合、3.11当日には仕事の関係で国外にいたのですから・・・。そうした、いわば「負い目」は私をひどく苦しめ続けました。そして私は被災住民さんたちに、そのことを詫びながら懸命に関わってきました。しかし被災住民さんたちは、だれひとりとして、そうした私を責めることなく、自分たちの辛さを語りながらも、あたたかなまなざしを私に向けてくれました。困難さの極限を体感した人たちが醸し出す限りなき優しさに触れた、この10年間でした。だからといって「試練は恵みである！」などときれいな言葉で整理できるような単純な優しさとは異なります。

◇当たり前ですが、辛いことは辛いのです。そしてその辛さは固有のもので、おそらくは皆、ご自分に与えられた辛さが、もっとも厳しいように感じておられるのだと思います。当事者さん同士では、いわば「傷口をなめ合う」ような言

動が、ときおり見られます。そして気持ちにゆとりがない内は、なかなか相手の辛さを受容できずに、自分の辛さだけを延々と語る場合も見られます。つまりは「自己受容と他者受容とは正比例をする」ということです。他者の在り方を健全に理解するには、まず等身大の自分自身を健全にみつめ、それをバランス良く認識する必要があるからです。

◇ただ日常的に、ご家族や、学校側&教員、さらにはその他の「良き理解者」さんたちに包まれている場合は、ある程度は、自らに与えられた困難さを平静さをもって受けとめつつ、前向きにお子さんと歩むことができるのかもしれませんが。しかしさまざまな事情背景で、そうした環境状況が乏しい場合は、ときとして「だれも自分の辛さを理解なんかできない！」とばかりに心を閉ざしてしまう保護者さんもおられるのです。否、これはお子さん本人も同じかもしれません。「心の扉」は他者が外側からこじ開けることはできません。当事者さん自らが開いてくれるのを待ち続けるのみなのです。そうした点から言えば、勇気を持って自らが「心のドア」を開き、こうしたSNSで切なる想い(それが、たとえネガティブ的な内容であったとしても)を吐露しようとするのは決して否定されるべきことではないと私は思うのです。オープンマインドそのものは評価されて良いものだからです。

◇ソーシャルワーカーである私は、つまりは第三者的な役割を果たすべき立場に置かれている私は、語る側の辛さを、批判や否定せずに、共感的視点をもって、あるがままに受け容れつつ、共に歩もうとしています。そのため、「大丈夫です。必ずそうなります！」であるとか、「ああした方が良くこうした方が良く！」などと断定的に書き述べることはしませんし、そもそも体質的にできません。そのため、自信たっぷりに語るような人の存在は、私にとっては、はるかに遠い別世界の人なのです。ましてや困難さを抱えて苦しんでおられる人に向かって、「こうすれば解決できます！」「このセミナーを受ければ・・・」等々と、ご自分のビジネスの顧客として招き入れようとするような人たちの存在は私にとっては、さらに遠い存在です。

◇生来的な気質に加えて、ソーシャルワーカーである私は、相手の想いに寄り添おうとするため、つい「そうですかぁ・・・。そうですよねえ・・・。」的な言い方になってしまうのです。それを繰り返しながら、やがて時いたって、当事者さん自らが、より良き自己選択&判断・決断を導き出すことができるための側面的なお手伝いをさせていただきただけなのです。以上です。より詳しくは、ホームページをご覧くださいと感謝です。[<https://caritas7.com/om>]

◎「ミラー」たるべき支援者の役割について

◇八巻正治です。ご丁寧な書き込みを感謝します。お子さんの不登校経験から新たな実践に踏み出されたとのこと。素晴らしいですね！ これまで綴られた文章の大半を拝読させていただきましたが、中学校での生活は辛かったみたいですね。読む私の方も辛かったです。

◇さて、お伝えいただいた4ステップは、スイス生まれの精神科医で、「死ぬ瞬間」の著者として知られている[キューブラー・ロス]さんが提示した5段階([1. 否認と孤立]⇒[2. 怒り]⇒[3. 取り引き]⇒[4. 抑うつ]⇒[5. 受容])の視点と類似しているみたいですね。

◇私個人は「森田療法」の考え方に親和性を有しています。要は健全なる自己受容です。逆に言えば、それほどまでに健全なる自己受容が困難であるということかもしれません。平たく言えば、「等身大の自分自身の在り方を、あるがままに受けとめること」だと思ふのです。それが乱れると、「私が苦しんでいるのは、〇〇が〇〇だからだ！」などと、相手や周辺環境に対して批判的な考えを有してしまったり、逆に、「この子がこうなのは、私が〇〇だったからだ・・・。」などと、過度に自分自身を責めてしまったりするのだと思ふのです。

◇もしも自分一人では健全なバランスの保持が難しい場合は、それを少しだけ離れたところから(温かく)見守ってくれる存在が必要なのだと思うのです。そして、その人を見ていると、まるで鏡(ミラー)に映る自分自身を見ているような気になるのです。ソーシャルワーカーなどの支援者は、そうした役割(これをミラーリングと言います)を果たすべき存在なのです。換言すれば、共感的理解に基づく受容と傾聴のまなざしです。

◇そうしてミラー(支援者)を通して映る自分の姿を見ながら、徐々に自己修正を図ってゆくのだと思うのです。別の

視点からそのステップを示したのが[マズロー,A.]の自己実現の考え方だと私は思っています。さらには自己改善を図るためのパワーを身につけていただくための関わり方を「エンパワーメント・アプローチ」と称します。これもご存じかもしれません。つまりは自らが有する問題の多くは、自ら自身で改善可能であり、そのためのお手伝いをさせていただくのが支援者の役割である、ということです。

◇困難を抱えているお子さんや、ご家族が、ご家庭内で、日々、直接的に対峙する関係は、ときとして緊張感が伴います。それを緩和するためには、そこに潤滑油的な存在が必要となってきます。それがソーシャルワーカー等の支援者なのです。具体的には、家庭訪問や関係諸機関等の社会資源を活用し、それらと有機的な連携を図り、当事者家族さんが置かれている環境を調整しつつ緊張緩和を図ろうとします。そして当事者家族さんと共に成長してゆこうとします。自画自賛ですが、福祉支援職って素晴らしいですね！（笑）

◎支援者の基本的役割と、その姿勢とは？

◇ご丁寧なコメントの書き込みを感謝します。その後、お子さんの状態は、いかがですか？ さぞかし日々、生きるためのエネルギーを使っているのだと思います。そのため、自分でも冷静に整理ができずに、一貫性のある言動が難しいのかもしれませんが。でもそれは大人でも同じですものね。

◇今回の私の文章の最後に書いたように、それがソーシャルワーカーであれ、カウンセラーであれ、当事者本人が「より良き自己選択&決断」がスムーズにできるための側面支援が基本的役割です。そのため、「これはどうしたら良いですか？」などと問いかけても、よほどのことがない限り、自分の考えを開示することはありませんし、極力、回避するようにします。その結果、「この人はなんて不親切で冷たい人なのだろうか？」といった視線を向けられることもあります。（涙）

◇これも私の文章に書きましたが、私は仮設住宅で数多くの被災住民さんたちと接してきました。そんな中で、しばしば、「家も何も、みんな津波で流されてしまって、これからどうやって生きていけば良いと思う？」といった問いかけの言葉に出会いました。それに対して、「私に問いかけられたので、それでは私の考えをお伝えしますが・・・」などといった対応は決してしないのです。自分の価値意識を伝えるのが支援者の役割ではないからです。これが親子や肉親等の場合は、関係が近い分だけ、互いの価値意識のぶつけ合いになったりもします。親しい友人等も同じです。関係性が「濃い」からです。さらには、親子関係をはじめとして、この先もそうした関係性が継続されるからです。

◇「どうしたらいいと思う？」に対しては、「そうですね。あれもあるし、これもあるし、なかなか難しいですね・・・。」と反応しつつ、「〇〇さんなら、どうしたら良いと考えているのですか？」と逆に問いかけ直すと、「今は、こんな方向性を考えているんだけど・・・」などと語ってくれたりします。つまりは自分の気持ちの整理がつかないため、それを整理しようとして問いかけてくる場合が多いのです。これも「ご自分の人生設計は、ご自分で組み立てねば！」との支援原則からの対応です。

◇これと正対するのが「こうすれば人生が楽に生きられます！」「困難が即座に解決されます！」「私にはそのノウハウや、思考パターンをお伝えすることができます！」などといった、いわば「成功哲学」的な考えです。それに対して相談支援は、「他者の喜び・悲しみを、わが事として、共に前向きに歩みを進めよう」とする「プラス思考・可能思考」です。しかし決して少なくない人たちが、お金を払い、カリスマ的な雰囲気醸し出す人が語るハウツー的な言葉に心酔したりもするのです。これも一種の依存です。

◇「ご自分の人生ですから、苦しくても、ゆっくりであっても歩みを止めないようにしましょうね。ご自分なりの良き判断や行動ができるように、私もできるだけ〇〇さんと苦楽を共にしながら歩みますから！」が相談支援の基本的姿勢です。それが「寄り添い支援」であり、「寄り添い人(びと)」としての姿勢だと私は考えています。ああしたら・こうしたら、的な関わりは、まるで易者さんのようです。そのため、その易者さんがいなくなった途端に不安になります。

◇俗に「転ばぬ先の杖」という表現があります。しかし人間は転んで痛い思いを重ねながら人生処方を受得してゆく

だと思うのです。ところが「痛い思いをさせたくない！」と考えて「かごの鳥」状態に置こうとする人たちもいるのです。私は最初、脳性麻痺児たちの臨床現場で働いていました。その当時は、「この子たちは気の毒な子どもたちなのだから、私たちが精一杯の愛情を注いで護ってあげねば！」といった価値観が強く存在していました。関係する組織体の名称も「愛護協会」でした。もちろん、現在は名称変更がなされていますが…。いっぽうで、「かわいい子には旅をさせよ」であるとか「若いときの苦労は買ってでもせよ！」といった言葉もあります。ほんとうに難しいですね。それでは、また！

◎家庭内での養育が辛いので、わが子を外部の支援機関に委ねようかと考えることもあります。

◇ソーシャルワーカーの八巻正治と申します。誠実で謙遜なまなざしでの書き込みに、こころ惹かれる思いで読ませていただきました。

◇ひとり親家庭さんとのことで、養育状況が少し制約されておられることと思います。そしてご自分に与えられた状況の中で懸命にお子さんに向かい合おうとしておられる姿勢に共感します。

◇ご承知のように、さまざまな事情で家庭内養育が困難になった場合の福祉支援サービスとして社会的養護があります。児童相談所の一時保護所も、そのひとつです。ただ通常は2ヶ月程度であり、最大でも半年間ほどです。その間に次善の「手立て」を講じることになります。子ども家庭福祉の外部の支援組織体としては児童養護施設であるとか、児童自立支援施設、児童心理治療施設等があります。あるいはNPO法人等が運営している、いわゆる「居場所」もあります。

◇支援機関や施設に委ねること以上に、支援者さんとの出会いが大切だと私は考えています。業務だから、であるとか、こんな資格を持っているから、はあまり重要ではありません。困難を抱えている子どもや、そのご家庭の困難さを「我がこと」として受けとめて懇切丁寧に関わろうとしてくれる良き支援スタッフさんに出会うことができれば、共に困難さを分かち合いながら歩むことができるからです。

◇学齢期のお子さんは、どうしても学校という組織や、それに関係する職員たち、といった限られた人間関係に影響されることが多くあります。学校は、さまざまな状態の子どもやご家庭を包括する組織体であり、また支援職員たちで構成されているため、困難を抱えている子どもや保護者さんへの対応に特化した組織体やスタッフではありません。逆に言えば、そうした組織や人たちから必要以上の影響(学校側や教員たちから、こう言われた、などと)を受けるのは避けた方が賢明な場合もあります。

◇ご承知のように、それが子どもであれ、大人であれ、人の歩みや成長は「ハウツー」的なものではありません。日々の生活場面を通して、「行きつ戻りつ」を繰り返しながら積み重ねてゆくものです。そうした場面&場面に丁寧に寄り添ってくれるような支援者さんに出会うことが何よりも大切と私は考えているのです。ただ現実的には、なかなか「良き出会い」は難しいと思われれます。しかし社会的養護に関連した支援組織や施設等には、学校と較べて、はるかに多くの適切な支援者さんが配備されていることは確かです。なぜなら、学校とは役割機能が異なるからです。

◇当たり前ですが、辛いときには「辛いです！」と切なる想いを吐露されることは、なんら恥じることはありません。場面&場面では、「もうこんな子どもは手放してしまいたい！」とさえも思われることもあることと思います。常に一定の感情を保持できる人など、そう多くはいませんものね。逆に「弱さは恵み」でさえあつたりもしますものね。ただ、できるだけ前向きな気持ちで、ご自分の気持ちを吐露されることの方が改善につながるような気がします。なぜなら、多くの場合、「もうダメだ！」といった表現を多用すれば、事実、そのようになることが多いからです。

◇私自身は、当事者家族さん同士の支え合い(セルフヘルプ・グループ)がもっとも有効であると考えている者です。ただ、そこには学術的に承認を得た、専門的知識と訓練とを受けた、支援スキルが高い「ファシリテーター」が配備されている必要があります。そうでないと、強い意見を持っておられる特定の人の意見に、そのグループが引きずられてしまったり、グループの雰囲気が悪化したりもしますので注意が必要です。いわば「無法地帯」になってしまう危険性

です。

◇個人的に注意していただきたいのは、あたかも「こうすれば解決できます！」などと自信ありげに断定的に表現をしたり、それをビジネス化してしまうような人たちの存在です。ソーシャルワークもカウンセリングも、精緻な理論体系と支援スキルが整備されています。そのため、そうした学術的に承認されている専門的な知識習得や支援スキルの修練を経た人からの意見は「ある程度」は参考になりますが、個人的な経験率や人生観に基づく意見提示に振り回されないことが肝要と私は考えています。

◎特別支援対象の子どもを持つ、ひとり親家庭です。

◇そうですね。それはお辛いですね。ご承知のように、学校には不登校担当教員やスクール・カウンセラー＆スクール・ソーシャルワーカーたちも配備されています。居住地によってさまざまですが、外部の支援機関として放課後等デイサービスなどもあります。人との出会いはとても大切で、お子さんや、保護者さんのお気持ちに丁寧に寄り添ってくれる良き理解者や、支援者たちに出会うことができると良いですね。

◇そうでしたか。お仕事先が福祉作業所でしたか…。それはいいですね！ ただ一般的には、福祉作業所の場合、経済的には少し厳しい状況なのではないでしょうか。

◇私が親しくしていた人に、福祉施設で出会った人と結婚した人がいます。そして生まれたお子さんが二人とも重度状態でした。やがて福祉施設を立ち上げました。

◇私も自分が居住する地域でボランティア活動を行っていますが、さまざまな人たちとの温かな「つながり」が生まれます。お互いの支え合いは励みになりますね！

◇そうでしたか。お子さんが小さいときは、お家を離れる時間が制限されたりして、勤務条件が厳しい仕事に就くことはできにくいものです。さらに、こうした状況ですので、飲食業や接客業等、どこも厳しいのですが、同じく福祉作業所であるとか、就労支援型施設も運営が厳しいみたいですね。

◇活用できそうな福祉支援サービスや教育支援サービス等を最大限に利用しつつ、同じく人的資源(お仲間)も最大限に活用できると、支え合いながら歩むことができますよね。今日はそうした会合に参加してきました。困難さを一人で抱え込んでしまうことを避けるための支え合いネットワークの構築です。 - 以下、略 -

◎スクール・ソーシャルワーカーさんからペアレントトレーニングを勧められました。ちょっと、違うような気がするのですが…。

◇これはスクール・ソーシャルワーカーさん(以下、SSWr)との人間関係から来るような気がします。SSWrは職務上、さまざまな情報提供や関連機関等との連携を行おうとして、保護者さんに関連情報を提供しようとしています。ただそれがご自分たち親子にとってフィットしていない場合には、やんわりと拒絶すれば良いのです。この場合は「ペアレント・トレーニング」といった内容のため、「これまで自分としては懸命に子どものことを考えてエネルギーを注いできたつもりなのに…」との想いが強ければ少し悲しくなり、違和感をおぼえられたのかもしれませんが。

◇私などは、1年以上、関わってきたある保護者さんに対して、さまざまな情報を得てきた結果、「やはりポイントはここだよなあ！」との思いに至り、ようやくあるプランを提案しました。その反応は想定されたとおりでした。つまりは「的中した」からです。それほど、ある支援プランを提示するためには慎重であるべきと考えているのです。思いつき程度で提示すべきではありませんし、ましてや支援対象さんの状態を正確に把握せずに(これをアセスメントと言います)提示すべきではありません。私はそう考えながら実践に取り組んでいます。

◎スクール・カウンセラーさんとの関係

◇私の考えを提示すべきかどうか、しばらく考えましたが、ご家族を愛し、お子さんを愛しつつ、悩みながらも誠実な姿勢で懸命に生きようとしておられる姿を拝見させていただき、尊敬の念を持って提示することにしました。それは以下のスクール・カウンセラーさんの発言に関する文章についてです。

スクールカウンセラーさんには、「もう離婚届出すなら出させてもいいかもしれませんね、そこが本質ではないですし。それこそ紙切れですよ。これまで離婚話が足かせになって前に進めなかったから、それでスッキリさせてまたゼロからやり直すのもありだと思いますよ」と言われました。

◇もしもこうした発言が事実であるとしたら、かなり問題発言です。懲戒処分対象です。なぜなら役割業務を逸脱した発言だからです。これでは単なる「人生相談」だからです。新聞や雑誌等での、この種の相談とコメントには責任は生じません。これは、こうしたSNSでの発言も同じです。ただ、よほどの誹謗中傷行為であれば別ですが・・・。

◇支援業務としての関わりである場合は人生相談とは異なります。アドバイスではなく、その人が、より良き自己選択・決定が行えるようになるための側面支援だからです。そのために必要な情報提供は行いますが、「どうしたらいいですか?」「こうしたらいいですよ!」的な発言やアドバイスは避けるべきだからです。ましてや真剣に悩み続けた結果として離別を考えているご夫婦の関係といった、きわめてデリケートな部分にまで関わろうとするのは、公的役割として任用されているスクール・カウンセラーとして逸脱行為そのものだからです。

◇多くの場合、自分にとって心地よい返答が返ってくると、「この人はなんて良い人なのだろう・・・」と考え、感情移入(転移)が始まります。そしてその人物(この場合は、スクール・カウンセラー)が提示する考えに同調しようとし、それが高じると、まるで洗脳されたかのように無批判的に従おうとして、他の意見が耳に入らなくなります。つまりは依存関係です。余談ですが、カウンセラーさんが異性の場合は、その人に個人的な感情を抱いてしまう場合もあります。なぜなら、「これほど親身になって話を聞いてくれて、私の立場に立って考えてくれる人はいない。この人ともっと親密になりたい!」などと誤解してしまうからです。

◇例えば、ご自分が抱えていたある問題が改善されたとします。そのとき「ありがとうございました。カウンセラーさんのおかげで自分の問題を解決することができました!」などと言わせて、「いやいや、それほどでも・・・」などと返答するような関わりはすべきではないのです。そうではなく、「自分が抱えていた問題が自分で解決できるようになりましたから、もうカウンセラーさんの関わりは必要なくなりました!」に対して、「それは良かったですね。もともとご自分で解決できる力がおありになったのですね。そして、それを見いだされたのですね。それを聞き、私も嬉しいです!」との対応が望むべき姿勢なのです。これをエンパワーメント・アプローチと称します。

◇肉親・親族であるとか、恩師といった個人的な関係ではなく、報酬を得ての役割業務として関わろうとする人(しかも多くが1年任期の非常勤職)との「間合い」は慎重であるべきです。支援者ができることは、より良き自己決定がなされるために必要な情報提供は提供しつつも、相談依頼者さんの気持ちが右に流れれば、その流れに受容的に寄り添い、左に流れれば、同じように受容的に寄り添おうとします。

◇さまざまな人たちの意見は参考にしつつも、最終的には、ご自分の人生は、ご自分の責任と決断で切り開くのが原則です。ましてや役割業務で関わってくれている人の価値意識・価値観に、必要以上に影響を受けることがあってはなりません。また、関わる側も影響を及ぼしてはなりません。支援業務に携わる者は、自らが果たすべき役割を終えたならば、必要以上の影響力を及ぼさずに静かに退くのです。これがプロとしての矜持(きょうじ)なのです。私はそう考え、またそうありたいと願っています。とても難しいことですが・・・。

◇ご丁寧な書き込みを感謝します。誠実な姿勢を強く感じます。というより、変な表現ですが、誠実さがあまりにも強すぎて、ご自身の困難度を高めておられるような気がして心が痛みます。俗っぽい表現ですが、とても&とても優しいお心をお持ちなのだと思えます。そのため、だれかを攻撃したりはせずに、ご自身のいたらなさを責めようとするのだと思えます。こころ優しい人は、他者の痛みを、我がことのように(否、それ以上に)感じる人が多いのだと思うか

らです。

◇私などは、いつも原理・原則論を書き綴ってばかりで、思い遣りの気持ちが不足していますね。ただ私が申し上げたいのは役割機能ということです。確かにお子さんが学校に在籍しているご家族が離別問題に直面しているといった事態は、お子さんをお預かりしている側としては無視できない「心配事」です。ただ、だからといって、きわめてプライベートな問題である、ご家族の問題をストレートに学校に持ち込まれて、あの人&この人に語り始めたり、聞く側もそれに反応したりするのは、あまり通常ではありません。

◇こうした家庭内の問題を、カウンセラーや養護教諭等にお話をされずとも、どなたか信頼のおける人たちが周囲におられると、ずいぶん精神的なご負担が軽減されるのでは、と思われま。そうした人がおられず、それを生業(なりわい)とされるような機関や、人たちに依頼すると、高額の相談料が課されることも多くあります。それはそれで、その人たちの生活がかかっているため、しかたのないことかと存じます。聞くと、ホテルのロビーや喫茶店等で待ち合わせてのカウンセリングもあるみたいです。

◇カウンセリングは、その人の思想や哲学には介在せずに、その人の思考方式や行動様式の変容に向けたアプローチをします。いわば「心の持ちよう」の領域です。ソーシャルワークは、それを環境との関連でとらえようとしています。例えば、「経済的にお子さんを育てることができるのだろうか？」などといった現実的な問題の改善を側面支援しようとしています。経済面での困難や、子どもにはやはり両親が必要である、などといった形式論は無視できないため、そうした側面の支援を考えます。例えば生活保護等の申請や、児童養護施設や児童心理治療施設といった社会的養護施設・機関のご紹介等です。わが国の福祉制度も、そう見捨てたものではないですよ！

◇心から親身になって心配し、丁寧に、そして受容的に温かく見守ってくださる人(権利擁護者)が近くにおられるといいですね！

◎スクール・ソーシャルワーカーさんの姿勢に疑問を感じる。

◇ソーシャルワーカーのひとりとして、まことに申し訳なく思います。

◇スクール・ソーシャルワーカーは、最低限、精神保健福祉士か社会福祉士の国家資格を保有している必要があります。ただ、この数年、国は、いわば「倍々ゲーム」のようにして増員を図ってきたため、退職教員や元警察官等々の人たちが数多く参入しています。自治体の都合で、と言うより人間関係のレベルで、有資格者よりも無資格者を雇用している自治体も現実にはあります。その人の発言を聞いていると、優れた支援理論体系を有するソーシャルワークが有する原理・倫理・スキルとは激しく乖離しています。あまりにも悲しすぎて嘆息のみ、です。

◇ただ、これは形式論であり、資格を有さずとも、子どもの最善の利益を図るべく、懸命に困難さを抱えている子どもたちや、その保護者さんを主軸として活動しているソーシャルワーカーたちも数多くいます。個別性が高いです。対人支援の領域で活動する場合は、やはり「人」の問題が大きいですね。私も引き続き、修練を重ねます。申し訳ありませんでした。

◎不登校の子どものことで、周囲の人から、あれこれ言われるので困っている。

◇親切ごころに満ちた(と、ご本人は思っている)、いわゆる「お節介屋さん」の存在は「ありがた迷惑」であることが多いですね。お察しします。私も気をつけねば、と反省させられました。

◇私なども、つい、自分特有の「気質」から生じる対応をしてしまいがちになります。相手は相手が有する「気質」があり、自分とは異なる受けとめ方をすることに、つい気づかずにいるためです。

◇私の場合は、ほとんど「NO!」と言えない気質のため、「アサーション」の学びが効果的と言われてセミナーに参加したことがあります。でも理屈は理解できても日常生活での実践となると難しいですね。ソーシャルワーカーとしての対応に際しても、「こういった親には、このようにビシッと伝えた方が良いのヨ！」などと言われていたりして、それが言えない優柔不断の自分を嘆くことが多くあります。「言える人って、すごいなあ！」と率直に思います。そうした「気質」を有しておられるのですね。

◇幸い私の場合は「エニアグラム」という考え方(気質に関する理論)に出会い、この10年あまり、エニアグラムを深く学び続けてきました。その結果、他者理解が深まりました。他者理解と自己理解とは(換言すれば、他者受容と自己受容とは)正比例をするため、人間関係がずいぶん楽になりました。

◇それでも自分中心の私は、いまだに「相手がこう言ってくると(こうしてくれると)嬉しいのになあ・・・」などと思ったりもします。と同時に、自分の相手に対する配慮の薄さを感じてしまうのです。生涯、学びが続きます。

◎中学に入り、学校に行かなくなった。

◇ソーシャルワーカーの八巻正治と申します。お気持ちを綴られた文章を複数回、読ませていただきました。同年代の圧倒的多数の子どもたちが半日程度を過ごす「学校」に馴染むことができないことで、お子さん共々、さぞかし辛い日々を過ごしておられることと思います。

◇ご承知のように、俗に「中1・ギャップ」の渦の中で、もがき苦しむ子どもたちが数多くいます。わずか3学年なのに、1年生と3年生とでは、体格等がずいぶん違いますよね。さらには教科担任制になったり、部活に所属したり、自由服から制服着用になったり等々で、なかなかスムーズに適應できにくい子どもたちが一定数います。辛そうにしている子どもたちを見ると、「学校って子どもたちを苦しめる場でもあるんだなあ・・・」とさえも思います。私自身がそうだったからかもしれませんが・・・。

◇一般的な情報提供で恐縮ですが、まずはクラス担任さんとの連携を取るように努めてください。毎朝、欠席の電話連絡をするだけでも辛いと感じる保護者さんもおられますが、電話を取るのは教頭や主幹教諭です。そこからクラス担任に情報が流れます。親切で優しい人たちであることを願います。

◇中学校では、ひんぱんに生徒指導委員会(名称はさまざま)が開かれ、生徒個々に対する組織的な対応が検討されます。その結果、生徒指導主事(主任?)が関わってくる可能性もあります。あるいは不登校担当教員が関わるかもしれません。そこで、さまざまな情報が提供されます。その一つが「別室登校」です。学校やクラスに馴染むことが難しい生徒たちが対象となります。そのクラスの担当者は自治体によって、さまざまです。ベテランの退職教員をあてる場合もあります。

◇その時点で、スクール・カウンセラーさんを紹介してくれる場合もあります。さらにはスクール・ソーシャルワーカーにもつないでくれる場合もあります。私個人としては、この時点で、つないでいただきたいと願っているのですが・・・。つないでいただければ、即座にご家庭に連絡を取って連携を図ろうとします。

◇学校外の支援機関としては、これも自治体で名称が異なりますが、教育支援センターであるとか、不適應指導教室等との連携を図ってくれる場合もあります。各自治体のホームページには、そうした支援機関の情報が載録されています。さらに自治体によっては、家庭を訪問して個別的な学習支援をしてくれる非常勤職員を雇用している場合もあります。大半が退職教員たちで、優れた人たちです。

◇少し抵抗感があるかもしれませんが、歯痛の際は、痛みを和らげるために歯科クリニックに通うのは通常のことです。同じく学校に馴染むことが難しい場合は、無理矢理に行かせて、さらに苦痛を増すような対応ではなく、苦痛や困難さを和らげるような対応をしてくれる機関や担当者&専門職員のサポートを得ることも、同じく通常のことです。避

けるべきは、保護者としての責任感から生じる「抱え込み」です。あるいは孤立感です。以上、いくばくかでも、お支えになるための情報であったならば幸いです。

◎子どもが望まないのに、担任が強引に子どもの部屋に上がり込んできた。その後、子どもがひどく傷ついてしまった。

◇とても悲しい思いをされたのですね。心が痛みます。

◇関わる側(この場合は教員側)が、不登校状態は教育指導の一環である、との視点が強い場合は、たとえ子どもが会いたくないと意思表示をしても、やや強引な対応をしてしまうことがあるのだと思います。それでも小学校の場合は(個別性がありますが)マイルドな対応をする教員たちが多いと思われそうですが、中高の教員たちは教科担当者としての意識が強いためか、つまりは「自分は〇〇の教科が専門だ！」との意識が強いためか、相手を指導しようとする意識が働くのだと思うのです。常に「指導」や「教える」という概念で子どもたちや保護者さんをとらえようとする意識が働くような気がします。確かに〇〇の知識や教科指導に関しては卓越しているかもしれませんが、対人支援に関しては、それとは連動していません。はっきり言えば、弱い立場に置かれている人や、困難を抱えている子どもたちに丁寧に寄り添おうとするまなざしが、きわめて弱い教員たちも残念ですが多くいる、ということです。

◇福祉支援を理論ベースとするソーシャルワーカーは、とことん利用者本人(この場合は児童生徒たち)の、より良き自己選択・決定を最大限に尊重しつつ、側面支援を行おうとする視点に立ちます。そのため、子どもが会いたくないと言えば、「また来るからね！」と穏やかに言いながら退去します。決して強引な対応はしません。ただソーシャルワーカーという職名を有し、ネームプレートを着けてはいても、その人の背景が退職教員さんであったり、元警察関係者さんであったりした場合は、ソーシャルワークの理論ベースを把握していないことが圧倒的ですので、個人の価値意識で対応してしまう傾向があります。雇用する側(自治体や教育委員会)が「スクール・ソーシャルワーカーとして任ずる」との辞令を交付してしまえば、その人の背景構造がどうであれ、「自分はスクール・ソーシャルワーカーだ！」と言いつつ、福祉支援の理論や価値・スキル等を無視した不適切な対応をしてしまうからです。自治体や教育委員会の責任は大きいと思います。原因は、ここ数年間で急激にスクール・ソーシャルワーカーの数を増やしたためです。さらには教職経験があれば、ソーシャルワーカーとしての活動もできる、と自治体や教育委員会側が考えているからです。そのため、もしも不適切な対応姿勢であると感じられた場合は、「精神保健福祉士&社会福祉士の国家資格を持っておられますか？」と確認できれば良いと思います。こうした細かな内部状況や実態もあるのです。

◇それがソーシャルワーカーであれ、教員であれ、最大限に尊重し、遵守すべきは「子どもの最善の利益の追求・維持・保障(保証)」、すなわち権利擁護(アドボカシー)です。もしもそこから逸脱していた対応であれば、明確に拒絶すべきと私は考えます。少し言い過ぎたかもしれませんが、お許しください。長文を、お読みいただき感謝します。

◎スクール・カウンセラーさんに、あれこれと強い言葉で言われてしまった。

◇綴られた文章を読ませていただき、私も辛くなってしまいました。ご家族の皆さまが、それぞれの辛さを抱え込んでおられるのですね。

◇お身内の方であれば、ある程度、踏み込んだ意見を提示できるのかもしれませんが、非常勤職であるスクール・カウンセラー(SC)さんが本当にここまで当事者家族さんに向かってご自分の感情を表現するとは、とても信じることができません。支援論的には、とても考えられない対応姿勢だからです。私には何かの間違いとしか思えません。それほどSCさんの対応姿勢は常識的ではありません。

◇相談支援に携わる人間のベースは全面受容です。無批判的な傾聴&無条件の絶対的肯定にあります。ですからSCさんの表現は、たとえこれまで深い信頼関係にあり、今後ともそうした親密な関係が継続されることが想定されたと

しても、他人である以上、そしてご家族の方々に生涯、関わるできない以上、踏み込むべき限度を超えていると私は考えます。

◇当事者さん同士でのやりとりは、俗に言う「売り言葉に買い言葉」的な感情論に陥る危険性がありますので、可能な限り、それは避けた方が賢明です。ご家族の皆さま、お一人おひとりの想いを、批判的なまなざしではなく、全面受容のまなざしで、静かに、そして深く受けとめてくれるような第三者や専門家の助けを求めるのが適切かもしれません。

◇ご家族の皆さまが、それぞれ辛さを抱えておられ、そうした「負のエネルギー」で相手に攻撃的な姿勢で対するような関係が続けるならば、お互いに疲弊してしまい、さらに辛くなるだけです。

◇利用可能な支援機関としては家庭裁判所であるとか児童相談所があげられます。家族療法を行っている精神医療機関の活用も考えられます。いずれにせよ、ご家族のみで今後の判断や決断をされないことを願います。

◇何らのお支えにもなることができず、申し訳なく思っています。

◎日々、辛いですが、前向きに歩んでいます。

◇文章を2度、読ませていただきました。これまで、さぞかしお辛かったことと存じます。

◇お子さんの養育への責任感から、お一人で抱え込みながら懸命に歩いてこられたことも知りました。立派でしたね。ただその分だけ心的負担感もあったことと思います。

◇児童相談所であるとか、児童養護施設といった、いわゆる社会的養護に関する支援組織・機関は、困難さを抱えておられる当事者さんたちの支援機関として存在しています。その活用は私たち国民の権利です。遠慮されることはありません。いわば公的なレスパイト(一時的な休息)機関だからです。そして、そこで働く支援者たちが適切な「寄り添い人(びと)」であることを願います。

◇お子さんと離ればなれの生活は、さぞかしお辛いことと思います。それは、おそらくお子さんにとっても…。やがて、時が至って状況が好転することを願うのみですね。真実で、飾らない文章を読ませていただき感謝します。ありがとうございました。

◎義母との関係が難しいです。

◇関係構造上、義母さんにはストレートに言い返すことができにくいのでしょうか、お辛いことと思います。

◇同居の義母さんを含めて、おそらくは皆さまが狭い空間で生活を共にしておられるのでしょうか、それぞれ影響し合っているのだと思います。そして、それぞれの立場や役割からとらえた「言い分」があるのだと思います。もちろん、お子さんは、お子さんからとらえた言い分が…。

◇出過ぎた言い方で恐縮ですが、当事者さんによる関係調整が困難であれば、学校ソーシャルワーカーさんの介入(訪問支援)による環境調整を願い出ることも、ひとつのアイデアかもしれませんね。と言っても、ソーシャルワーカーは、お互いの言い分を受容的に聴き取るしかできないことが多いのですが…。

◇温かなまなざしで見守ってくださる人が、一人でもおられれば救われますものね。

◎クラス担任との関係がうまくゆきません。

◇お子さんの窓口となる役割は、クラス担任ですが、信頼関係を結ぶことができない場合は、当事者ご本人と保護者さんは、辛く悲しいだけですものね。お気持ちは良く分かります。学校には、学校長の他に、教頭や学年主任、不登校対応教員、児童生徒指導担当教員といった人たちもいます。クラス担任だけではありません。それにしても人間関係の部分で、エネルギーを消費しますよね！

◎担任教員の言動に躓(つまず)いてしまっています。

◇そうでしたか。それはさぞかしお辛かったことと思います。俗に、相手の足を踏んだ側は軽い気持ちであったとしても、気になっていることで足を踏まれた側のダメージは大きいですものね。私自身もソーシャルワーカーとして、普段の言動に気をつけねばと反省させられました。

◇ひとつのアイデアですが、もしもこの件について担任と直接的なやりとりをすることが負担であれば、学年主任か教頭に伝えるのも良いかもしれません。なぜなら、校内でそうした責務を担っている立場にある人たちだからです。学校側は保護者さんからのクレームを無視することはできないことになっているため、適切な対応が図られることと思います。ただ、保護者さんや、お子さんに納得のゆく対応をしてくれるかどうかは定かではありませんが…。

◇今後のこともあり、お子さんをお預けしている保護者さんとしては、担任と感情的な対立は避けたいですし、それは学校側も同じです。そのため、学年主任か教頭がワンクッション的な役割を果たしてくれる筈なのです。ただ、いきなり学校長や教育委員会へのクレームや、保護者間のLINE等の活用は感情的な対立が深まることにもなるため、避けた方が賢明かと存じます。

◇ソーシャルワーカーは、当事者さんの権利擁護(アドボカシー)を担う役割ですので、もしも私が保護者さんからこうした情報を得た場合は、必ず教頭に伝えるようにしています。反応が弱い場合は何度も伝えます。さらに反応が弱ければ教育委員会側にも伝えます。場合によっては文書でも伝えます。記録が残るからです。ただそうしたことは滅多にありません。ご不満に思われる方も、おそらくおられるでしょうが、信頼に足りる教員たちが圧倒的に多いからです。

◇ご承知のように教員と言っても、年齢や経験年数、性格特性や気質等、さまざまですし、正規教諭・常勤講師・代替講師等、背景もさまざまな人たちがいるため、個別性が高いのです。しかも困難性を有する児童生徒たちへの学習・生活支援に深い配慮や専門知識等を有していない教員たちも一定数いるため、不適切な人間たちもいることは事実です。と言うより、そもそもが教育職員という役割業務を果たしている一人の人間に過ぎません。ですから、「ああ、この人は無理だなあ…」と感じれば、悲しいことですが、その人間に必要以上に引きずられるのはエネルギーロスが大きいと思われます。

◇とは言え、お子さんや保護者さんは人格識見共に優れた存在として教育職員たちをとらえてしまいますものね。また役割業務とは言え、教育職員たちも倫理道徳的な表現を使うことも多くあります。

◇いずれにせよ、感情的なしこりを残さないためにも、当事者さん同士(保護者さんと担任教員)が直接的にやりとりをしない方が、悲しみに沈んでいるお子さんのためにも賢明だと私は考えます。以上、もしも踏み込みすぎたらお許しください。

◎良きスクール・ソーシャルワーカーさんと出会いました。

◇そうでしたか。それは良かったですね。共感的な理解を示してくれるソーシャルワーカーさんとの出会いは安心でき

ますよね。

◇ただソーシャルワーカーは医療職ではなく、生活支援職ですので、医療的ケアに関する発言やコメント&評価等は職務上、できません。せいぜい「こんな医療機関がありますよ！」程度の情報提供が職務範囲です。それはカウンセラーさんも同じです。養護教諭さんは教育職ですが、医療的ケアも担っているため、もう少し踏み込んだ情報提供が可能です。

◇ご承知のように学校には、さまざまな支援職員たちが働いていますので、効果的な活用をされることを、お勧めします。つまりは担任教員のみではない、ということです。

◇教員たちは学習支援職員です。教科学習の指導には熟練していても、ご家族を含めた、子どもの生活全体を考えながらの対応は、必ずしも得意ではありません。そのため、学習指導を超えた担任の言動に大きく影響される必要はないのです。もちろん、生活全体をみながら懇切丁寧に対応してくれる教員たちも多くいます。個別性が大きいのです。信頼できる人たちとつながることができれば良いですね！